

(4) 社会的関心

丸山が中学生1年次の冬、大正から昭和への改元が行われた。昭和の初期は景気の後退期にあたり、1927(昭和2)年に起きた金融恐慌のあおりを受けて、いとこの清は郷里松代からの進学を断念した。丸山は農村の疲弊を具体的な経験として実感したのである。

1928(昭和3)年2月に実施された第1回男子普通選挙の際には、立候補した菊池寛の演説を聞きに行った。当然、治安警察法により未成年は入れないはずだが、サバを読んで首尾よく入ることに成功した。演説会では菊池のほか、小島政二郎、横光利一、久米正雄の応援演説を聞いている。社会民衆党の立場を説明する菊池の軽やかな弁舌に感心したという。

この年には日本政治史上の大事件が次々と発生している。その中で、丸山に大きな衝撃を与えたのが1928年6月に起こった張作霖爆殺事件と、8月に持ち上がったパリ不戦条約問題である。張作霖爆殺事件では天皇の発言が結果として田中義一内閣の総辞職につながったが、父が「天皇さんエライ!」とほめている姿を目にしている。また、パリ不戦条約については条文中の「各自ノ人民ノ名ニ於テ嚴肅ニ宣言ス」という文言が日本の国体に反するとして、批准に反対するキャンペーンが行われた。政教社の社主であった井上亀六はもちろんのこと、父幹治も「田中内閣が困るのが面白いから、やる」といって『日本及日本人』誌上でこのキャンペーンに加担した。丸山は父のこうした態度に、一種の「マキャベリズム」を感じ取っている。

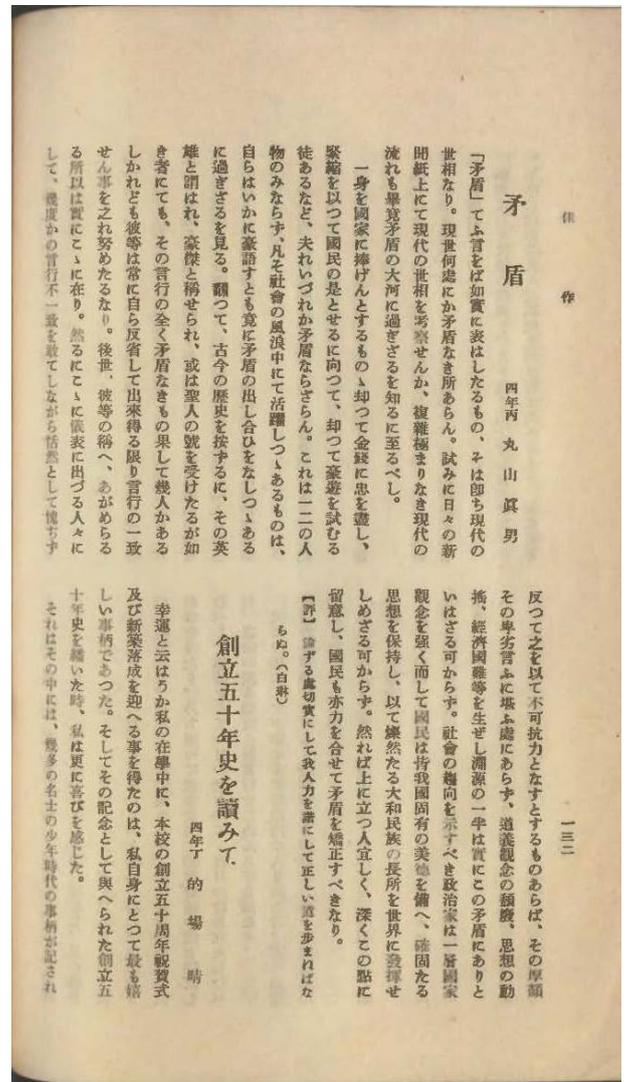
この頃の丸山は、中学生のことゆえ特段の思想的立場をとっていなかった。4年次の頃

に国語の授業で出された論題「現代世相の一面を論ず」に対して、「矛盾、これ豈^も現代世相の一面に非ずして何ぞや」で結ばれる長い作文を提出したが、これには政党政治の腐敗など、当時の社会の問題が切々と書き連ねられ、教師から激賞された。しかし、この作文が一中の校内雑誌である『学友会雑誌』（第100号、1929年2

月、画像）に「矛盾」という表題で掲載される際に、教師によって原形をとどめないほど書き直されてしまった。この文章を読んだ兄の友人は「眞男くんは国家主義者だね」という感想を漏らしたというが、中学校時代の丸山は政党政治の腐敗をはじめとする社会・政治問題に憤って

いたものの、国家主義者でも左派でもなかったと自己規定している。

(5) 文章修行



中学校時代は、丸山の文才が花開きはじめての時期でもあった。1年生の頃、江島への遠足の光景をつづった作文「広島遠足 一年丁」が『学友会雑誌』第93号に掲載されたのを皮切りに、初夏の風景をつづった「夏来る」(第95号)、世相を批判した前述の「矛盾」などの作文を生んだ。さらに文芸方面にも手を伸ばし、英詩を『学友会雑誌』に掲載したり("Ononotofu and the Frog"『学友会雑誌』第101号)、非正統派グループで作った同人誌に戯曲を書いたりした。丸山の文章は周囲にも認められ、5年次の軍事教練では配属将校の永沢少佐から「従軍記者」に任じられ、御殿場での教練の様子を記録している(「富士裾野発火演習記事」『学友会雑誌』第102号)。これには母セイは大喜びだったという。また、作詞した歌を学校に寄贈した。丸山の文才は開花の時期を迎えていたが、その方向性は未だ定まっていなかったといえよう。(丸山眞男『休暇日誌』〈丸山文庫資料番号 341-6〉)

